中村俊定文庫
文庫 18
638

寛政元　梅人撰

翁附合三句のわたり

仮題

けふのこゝろ　全

早稲田文庫

友とちかたらひけふの月み侍ることいくとせにやこの朋友に信有事理をはなれ居に落さる執しみはいつれも三句の執行なふめと猶はたとよひの月の前に亜翁の附合おこしをあちは一三句の渡りを摸て興するものなり

採荼庵 梅人

寛政元己夜

中村俊定文庫

謡ましく連歌の興をさますらん
敵寄せ来るむら松の聲
有明の架打忘ほし着たりけり
さかいの錦蜀をあらへる
隠れ家や寄舟の友に交りなん
筏に出て海苔すくふころ
糸にたち之にさま〳〵の荻
月みよすと引起されてはつかしさ

(大東京文具チェーン特製)

髪、あふかする羅の露
まつはる、犬のかさしに花折て
的場の末に咲る山吹
春を経し七ツのとしの力石
月影も寒て師走の夜の長さ
つえ壹本を道のわきさし
野鴉のそのにも袖のぬらされて

暮かゝる空につめたき擂あられ
たろさぬ窓に杖歌く杏
傘の綸をかく頭かたむけて
貝拾ひ〳〵行磯なれへ
酔ふては人の肩にとり付
けふの賀のいゑ面白や祖父か舞
九輪指さす尾上はるけき
風の音並ふ蘇鉄のいかめしき

（大東京文具チエーン特製）

大口着たる庭の雪掃
レミオ
みなと入帆の見ゆるやね越
世の中を畫に遁れたる茶烟
妹かかしらのからこわやさしき
かたみてふ袋の切のはつ〳〵に
夢をときく園の朝風
津の国の難波〳〵と物うりて

一巻の連歌をとしむ此寺に

苗代もゆる雨こまかなり

鷺の巣のいくつか花にみえ透て

吹揚らるゝ春の雪花

歸る鴨かへらぬ鴨もさゝハたちて

七耀山を出かゝる月

年寄のしのひて通ふ秋の風

髪きゝる霄の月そひそめく

一三ウ

長门より西の咄の根とひして

しるしたて堀にやりたる色指

あられの玉を捨ふ簑の毛

鳥を籠る鵜飼の宿に冬の来て

御輿は真葛の奥に隠し置

小袖はかまをたくる戒の師

我ほんの母に似たるも床しくて

一四オ

(大東京文具チェーン特製)

舟荷の鯖の時分はつるゝ

ゆひかけて細縄たらぬ花の垣

足袋ぬいて干す昼の陽炎

年頃にちいさきやつら供させて

した〱と京への枇杷を荷ひつれ

嫁とむすめにわる口をこく

客はみな寒くてこける（去る）火燵の間

L五オ

鳶の巣を立初る羽つかひ

蚕種うこきて箒手にとる

錦木を作りて古き恋をみん

夕顔を喰いて隣の膳を待

何の箱ともしれぬ大きさ

宿〱て咄のかはる喧嘩沙汰

樑から弓の落る秋風

八朔のれ（禮）はそこ〱仕舞けり

（大東京文具チェーン特製）

式

或日の日はかたふきて心せく

浅草米の出る川口

欄干に顒ならへて夕すゝみ

明日のいのちの飯けふり立

戻り舟夜も明かたに山みえて

鐘いくところ西か東か

念口山をはこふ下たり

道の辺の松に一喝しめし置

長者の輿に沓を投こむ

（大東京文具チエーン特製）

ねためる筋を春おしまるゝ

つはくらに短尺附て放ちやり

亀さかつきを背負ふさゝなみ

蒜にみゆる

投渡す岨の編橋旁こめて

風呂焼にゆく月のあけほの

湯屋の手透は八つ下りから

名月のもやうたかひに隠し合

一歩でもなき梨の切しもの
むみその信濃にかゝる秋の風
来てうかうかす去年の傍宗
氷宮といへは盗もゆるす也
につとあさ日にむかふ　橋　雲
苔たる松より花の咲こぼれ
四五人とほる僧長閑なり
新道町の子供の　古　能

(大東京文具チェーン特製)

聟と舅の出る挨拶
お宿の里下りしては涙ぐみ
塗たれ箱より物の出し入
けさからひとつ鶯のなく
春の日を産屋の伽のつゝくりと
かはる〱や湯漬喰らむ
二階はしこの薄くら板
寒さうに藥の下を吹たてゝ

?

No. 7

石町なれは無縁寺の鐘
　畠はあれて山葛の花
　日光へたんから下す秋の風
呉〳〵たのむ米のこと
夕顔や蒲生の家も敗れ行
　秋入ときの筋氣いたはる
　しほ浜に降つきたる宵の月
先住なりし寺のいさかい

七オ

(大東京文具チエーン特製)

10—20

黄ゐをまちて鴨ののつへい
　摺鉢に柾て色つくとうからし
障子かさぬる宿かへの舟
　祝ひはの済へりたる小豆粥
　ふすま極てあらふ油手
熱さに恋のこゝろをもたせはや
　踏まふ落花の音の朧月夜
　耶知の御山の春遠き空

七ウ

欄

弓はしめすくり立たるむすこ共
吹もしごらす野分しつまる
草足袋に雪駄重き秋の霜
伏見あたりの古手屋の月
築地のとかに典薬の駕
相國寺牡丹の花のさかりにて
椀の蓋とる茨に竹の子
八才

（大東京文具チエーン特製）

村はむ田つらは草の青み立
塚のわらひのもゆる石原
學僧の師にめぐりあふ春の末
よし垣に木やり聞ゆる婦の内
日々あかふ出る二月朔日
はつ花に伊勢の抱のとれそめて
水つきの稲の在下に肩重し
はえ黄はみたる門前の坂

皮剥の物煮て喰ふ宵の月　し八ウ

焦す處にいたく手をやく

見ぬふりの主人に恋をしられたり

すかた半分かくす傘

松茸をあふみ路からは沢山に

そくさいな子は下く／＼に有

走たるは御簾の外にかしこまり

（大阪東京文具チエーン特製）

人にとりつくうき名にたゝ

かや草の色もかはらぬ恋をして

秋たつ蝉の啼死にけり　し九オ

とり／＼に紺色の形をとり散し

冬至の縁に物おもひます

けは一とも梳へともし君かへりみす

とり井兀たる松の入口

笠敷て衣の破つゝり居

秋の島の人喰ひに行

花曇石の扉を押ひらき
美人のかたち拝む陽炎
夷の笛声なき蝶と身を化て
衣かつく小姓荻の戸をおす
月細く時斗の響く八ッ下り
槍をいそく消かたの露

琴爪おしむ袖の移り香
髪おろす侍従の娘おとろへて
野ゝ宮あらし妓王寺の鐘
たとこやしめの花えかなしき
風くゝる大とーの夜も七ツきく
御門をたゝく生鯉の券
いなか条に物みそめたる
おかつく前歯の香をなつかしく

[illegible]

（大東京文具チェーン特製）

たはれて君と酒買に行

ほそく書たる文のやさしき

盞をそこらに火燵とり巻て

とし寄飛と来日待つとある

大に追るゝあちのむら島

城山のはつ雪晴るゝ簑脱て

起て火を吹く鐘つきか妻

レナウ

（大東京文具チエーン特製）

山風にさひしく落る栗のいか
黒木ふすへる谷陰の小家
たか嫁と身をやまかさん物おもひ
日傘さす子共さそふて春の庭
衣をすてゝかろき世の中
酒飲めは谷の朽木も佛なり
殺生石の下はしる水
花遠き馬に遊行を導て

（大東京文具チエーン特製）

酒のまよひのさむるはる風
若黨に羽織ぬかせて仮枕
ちいさき顔の身たしなミよき
扇もゆるりと内のたさまりて
四日の月のまゝ細き影
秋来ても畠の土のひゝわれて
雲雀の羽のは之揃ふ聲

しエオ

二三年たつのは夢の其ごとく
髪をはやしてみ遠る歎
座敷には行燈つける暮の月
燒山越への雲のあかはけ
うち起す畠も花の木陰にて
つらも長閑に鶴の卵わる
棒の月一ツの窓に僧座て
澁つき初めしうらの藪陰

L十一ウ

(大東京文具チエーン特製)

みゝつくの己か砧や鳴ぬらん
すゞめ残す小田の刈初 ??
比秋も门の板橋崩れけり
赦免にもれて独みる月
人いそがしき年の暮かな
松柏あれて嵐の音すせ
子を射させたる猪の床

L十二オ

帯ほころはす金のたしなみ

寝ことさへ初流籠のなむ大悲

豆まきしまふ宵過の東

酒さます杖にかはそき免共

剃やと艾ふ老のもゝ裏

原宗功者に引て歸るなり

たか田の喧嘩はやむかしなり

夏寒き関の孫六ぬきはなし

たしなき凡の不嵩へ来る

はつ栗いく度こけて起上り

勅良をますとふ身こそたかけれ

鮓そえて経つむ舟を送る乳と

白かしの梢ハ寺の林にて

髪を切てミ身を作りけり

燒薫る物見の遣押まくり

（大東京文具チエーン特製）

月みの吟

名月やかゝみ折ぬくことし樽　柳規

めい月や更て流るゝ鐘の声　鯉昇

芋洗ふ水はにごりとけふの月　梅七

岩に服を濯て清しけふの月　浦嶋

鴨の伝かし　の歌をおもひて
魚も寄る蝉の小川やけふの月　梅節

名月やけ影抄は不老不死　梅府

玉露のおちりけりけふの月　角子

口そゝく夜も流れやけふの月　左拱

七十四

No. 15

（大東京文具チェーン特製）

唐島の籠ぬけとら一|月み哉　梅笑

名月や戻ぬ水い道る乾り影　洞風

出世鯉の一軸を之て

めい月や鯉の鮮の数よまん　里絃

名月やけふは亭主の樽捨ん　松人

、

侘くもこゝろ有けりけふの月　李庭

めい月やいよ〳〵清き玉出水　其真

名月や定てうらは天下一　千鯉

手料理に入相いつかけふの月　梅扇

（大東京文具チェーン特製）

名月や鵜それ〳〵の磯の松　鳥的

めい月やみるにこゝろを須戸の浦　不蒸

明月や差程明けて草の庵　凡曲

、

鶴の羽に霜やおくらんけふの月　萱奴

名月や漁父の住家の浦山し　芦凡

めい月や伏結の床の花すゝき　庵白

鏡なくは入日はしれしけふの月　一絃

名月や田毎の影の重砂　挂羅

起さる、鳥に寝るやけふの月　奥船

暮ぬ江に玉散のミそけふの月　輝水

久かたの月に眠らはいなは山　几後

むさし野は川しみゆるや月今宵　梅髯

月こよひ禅の掟し破れぬへし　亂十

名月や宝の市し今宵なら　奥紫

、

明月や门の柳は古籬　房七浦　宗拙

朝皃の咲て別るゝ月み哉　、東野

风音は浦の名床しけふの月　、砂旭

三派の流すみけりけふの月　、琴松

十二句

(大東京文具チエーン特製)

、

月こよひ鳥さへ鳴かす静なり　上総行川　梅林

月今宵旁に筑波を沖の石　、里丸

名月やあつけれ思き村鳥　大井谷　金石

月こよひ鏡の行末の根なれ　、金水

めい月や千金さえる里も有　、鳥谷

ひやひやと野ハたゝ廣しけふの月　、一意

詠かけし山し白さよけふの月　下総花しや　生水

明月やいつか糸瓜の化粧水　松戸　丁子

名月や森のみえる竹の奥　小山　梅鳥

十三句

名月や光を出る　草の露

名月や起てみ直れ宵の雨

丶

めい月や行末見送る放し亀

名月や萩に綾たる夜もすから

月こよひ秋なる樹々はなかりけり

丶

動くともみえす更ゆけふの月

寛政元仲秋

峯庵
梅人

(大東京文具チエーン特製)

七部集名遊門の紫苑西をなかして此ハ
多くを略す　六斎仙江戸に吟梅の牛
みなし栗三ヶ月日記延宝天和花心
集名之般を越せん貞享元禄の
翁附合鈔名をひとつ一冊と添付する
ものせ

昭和十三年八月寫字

No. 19

（大東京文具チェーン特製）

10—20